



# 寝る前の夢



ヤマダヒフミ

テレビを見ていたら、ニュースキャスターがあまりにトンチンカンな発言をするので、僕は思わず、ぷっと吹き出して軽く笑ってしまった。だが、僕の両親はそれを見ながら、真剣そうにうなずいている。

あほらしくなったので、僕は、親に「僕はもう寝るよ。明日、朝テストがあるから。」と言い残して、自分の部屋に戻った。実際は、そんなテストなんかないのだが。

僕は自分の部屋に戻って、少し、頭を痛めて考えた。この世の事。宇宙の事。そして————いや、何も無い。何も起こらない。もしも、ああ————と、僕は考えた。六十年代とかのビートニクなら、ドラッグと酒と女の子で盛り上がったのかもしれないが、だが、今や多分、東京大学辺りでも、「六十年代ビートニクの初期衝動について」とか、なんとか、そんなインチキでアカデミックで天才的な講義とやらをやっていて、そこではメガネと黒髪の、真面目そうな連中がそのインチキ講義を聴いて、うんうんとうなずいているのかもしれない。————「なるほど、ビートニクって、そういう連中か」なんてね。

僕は窓を開けて、夜風が入ってくるままにした。ここから抜けだして————ああ、どっかのオペラでありそうだな。「ここから抜けだして、あなたの元へ行くのよ——。夜風を切って——。」ああ、馬鹿な妄想はやめよう。宿題をしよう。宿題を。

宿題は次の歴史の授業で、僕が与えられた答えを答えるやつだ。何故、織田信長はあの時、ああしたのか、その理由を〇〇文字以内に答えよ————なんてやつだ。知らないよ。織田信長当人に聞いてくれ。……でも、多分、信長だって、答えられないだろうよ。「理由？ふん？。知るか。俺はただやるだけだ。そこをどけ」なんてね。

また、くだらない妄想に走ってしまっているな。僕は。妄想————妄想以外に何があるってんだ。僕らの青春は。全く……うんざりするよ。ほんとうに、ほんとうにさ。ほんとうにうんざりする。

ふと、今、思い出したけど、東京大学とか、そういうインテリ連中にとっては、世界はこんな風にわかれているらしく思われる。それは、動物園の檻の中の動物と、それを外で見ている観客との二種類に。で、インテリぶった連中はいつでも、観客気分、死体解剖でもするみたいに、古今東西の名作を切り裂いて、理解したとかしないとかほざいている。……全く。なんだってんだ。僕の腸をかさばいて、その内臓のシステムを理解したところで、僕という人間を理解したという事になるのかね。全くの所。

最近では、それはネットの連中もそうなんだが————奴らはいつでも、丘のような高い所から矢をぴゅんぴゅんと打って、それで当たれば大喜び。そうして、丘の下の僕ら駄目クズ共は永遠に、彼らの近場までよれないって事に相場が決まっているらしい。……うんざりするよ。全く。

ま、テレビとかもおんなじだけどね。褒めようが、涙を流そうが、どこまで行こうが、奴ら——連中にとっては、全部、他人事なんだ。所詮は、隣の村の誰と誰ができたとか、できなかったとか、そんな噂話のものにすぎない。そうして、その噂話に狙いをつけて————いや、もう、やめよう。せいぜい、騒いでくれ。僕はうんざりしたんだ。全く。

……僕は、明かりを消した。宿題はもうとうに終わっていた。その宿題は————適当にでっちあげたもの。僕の無惨な解答。でも、一応は努力したんですよ、先生、ほうら、ここのこういう単語は、調べないとわからないじゃないですか？ほうら？……的な解答だ。それは。

……まあ、それでいい。僕というのは、そういう存在なんだから。

僕はベッドに寝転がった。僕は十年後、一体、どうなっているだろう？……あるいは、二十年後。僕は、ああ、この間、ウィキペディアで調べたニール・キャサディみたいに、メキシコの

鉄道でひっくり返って死んでいる所を発見されるのだろうか？。それとも、ソクラテスのように死刑になるか、それともトルストイのように……おいおい、なんだって、そんな有名人の名前ばかりだすんだ？……お前は平凡な、何者でもない人間じゃないか？……遠くで、そんな声がする。うるせえ。と、僕はそいつに答える。僕は僕だ。僕は、僕の中で有名なんだよ。僕一人の中ではな。

ふと、起き上がって、窓を閉め、カーテンも締める。暗闇。静寂。……あるいは、階下での小さな物音が聞こえる。母親が一人でテレビを見ているのかもしれない。父はもう明日に備えて寝ているはずだ。

僕は目を瞑る。闇————闇から覚めても。……全く寝ても、覚めても夢を見ているような気がするぜ。明日は、気になるあの子にアタックしてみようか？……ウソ、ウソだね。そんな子はいない。もう、うんざりなんだ。僕は学校では、ずっとひとりぼっちなんだから。心の中では。そりゃあ、友人はいる。ガールフレンドもいた事があるが……ああ、こんな話はやめよう。もう、うんざりなんだ。あんな仮面連中の話なんか、したくない。……実は、僕は、結構いいとこのぼっちゃん的なところがあるんだぜ。で、学校の連中はみんな上品っちゃあ、上品なのかもしれないけど、それは、ただたんに仮面の被り方がちょっといかしているにすぎない。ニートであろうと、金持ちであろうと、王様であろうと、どこの誰であろうと、この世界で生きている限りは、仮面を被らなきゃいけない。あの不細工な仮面をさ。「おはようございまーす。」「いってらっしゃいませー」。

さよなら、僕はもう寝るよ。明日は学校に行かなくちゃならないんだ。そして、僕は新しい仮面を身に付ける。……？君、見てな。僕はね、この仮面を年が経るにつれて、二重に三重にも膨れ上がらせて行って、そして、最後には人々をだますほどの盛大な仮面を身につけて、そうやってどこぞのお偉いさんになって、愛人を一杯連れて、いいクルマに乗って、大衆を馬鹿にしつつ、私腹をこやしてみせるから。そうなったら、面白いぜ。僕は—————そうなるかもしれないな。全くの所。恥ずかしい話だけど。

もう、寝なきゃ。明日は早いから。